



営農NEWS



ダイズの多収をめざして ～播種までの取り組み～

本県の大豆の10a当たりの平均収量は126kgで（全国平均166kg）、低い水準にあります。大豆の多収を目指すには、播種前に土壌など生育環境を改善することや苗立ちの確保が大事なポイントになります。

1. 地力の向上

かつてダイズは「地力を高める作物」と思われていましたが、最近の研究では「地力窒素を多く吸収する（地力を低下させる）」ことがわかりました。そのため、多収を目指すためにはたい肥など有機物を施用して、地力を高めることが重要です。水稻、麦とのブロックローテーションを長く行って、大豆収量が低い圃場では10a当たり牛ふんたい肥などを1トン程度か発酵けいふんを200kg程度施用します。また、大豆全量基肥一発肥料（大豆一発588など）も有効です。

2. 排水対策の徹底

本県の大豆は約8割が水田（転換畑）で栽培されており、低収の大きな原因は湿害です。特に出芽時に湿害を受けると生育が極度に抑制されたり、枯死してしまいます。欠株や生育初期のダメージは挽回することができません。排水をよくして湿害を回避することが、多収をめざす基本です。

排水対策には暗渠の設置とともに、効果を高めるために弾丸暗渠やサブソイラなどによる助暗渠を取り入れることも必要です。また、圃場表面の水を速やかに排水することも大変重要です。明渠を掘り、排水口につないで、速やかに排水するようにします。圃場に合わせた排水対策を考え、計画的に取り組ましましょう。

3. 土壌pHの調整

ダイズは他に比べて石灰の吸収量が多い作物です。不足すると莢の数が少なくなったり、根粒菌の活性が低下したりします。また、豆に「ちりめんじわ」などが発生し、品質が悪くなるといわれています。土壌pH（KCL）を5.5～6.0程度になるように、消石灰や苦土石灰を施用します。後作の麦にも効果があります。

4. 出芽苗立ちの確保（種子処理剤の使用）

湿害以外にも出芽を阻害するものとして鳥害（キジバトなど）、虫害（タネバエ、ネキリムシ類など）、病害（茎疫病などの立枯性病害）があります。鳥害防止には忌避剤が有効ですが、ダイズ圃場周辺にエサが少ない場合は鳥ががまんして食べてしまい、効果が低いことがありますので注意が必要です。

表1 ダイズ種子処理剤の例（令和2年5月18日現在）

薬剤名	対象病害虫など	使用量	使用方法	使用時期	使用回数	分類
キヒゲンR-2 フロアブル	鳥害防止（ハト、カラス） 紫斑病 苗立枯病 タネバエ	乾燥種子1kgあたり 原液20ミリリットル	塗沫処理	は種前	1回	FRAC:M3
クルーザー MAXX	鳥害防止（ハト、キジバト） アブラムシ類 タネバエ ネキリムシ類 フタスジヒメハムシ 紫斑病 白絹病 茎疫病 黒根腐病 苗立枯病（ピシウム菌） リゾクトニア根腐病	乾燥種子1kgあたり 8ミリリットル	塗沫処理	は種前	1回	IRAC:4A FRAC:4と12

注）分類欄には、FRACまたはIRACコードを記載しました（コードが2つは混合剤）。

5. 適期は種の徹底

本県のダイズのは種適期は6月10日から7月10日のころまでです。それ以降になると生育量が確保できず収量が大きく低下します。やむをえず遅まきとなる場合は畝幅を30cmの狭畦とし、密植の効果により収量低下を少なくできます。株間は早い時期の播種は15cm位ですが、遅くまきときは10cm程度とします。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040